

# 「世界史」指導法の一試案

筑波大学歴史・人類学系 吉田 寅

## 序

古今東西の歴史事象を対象とする「世界史」の授業は、ともすれば歴史事実の通史的（系統的）把握が中心となり、歴史の学習を通して現代を考えていこうとする態度や能力の養成とは背馳しがちである。このような現状では、学習指導要領「社会科世界史」の目標である「世界の歴史に関する基本的事項を理解させ、歴史的思考力を培うとともに、現代世界形成の歴史的過程と世界の歴史における各文化圏の特色を把握させて、国際社会に生きる日本人としての資質を養う」ことはかなり困難であるといわなければならない。このような観点からも、学習指導要領においては、内容の精選・集約化をはかることや、文化圏学習・主題学習・人物学習などの重視、さらに学習上のさまざまな工夫が要請されているのである。生徒が意欲的に取り組むことのできる世界史学習を展開するためには、教育現場における積極的な努力が必要であり、多角的な視点から指導方法の探究がなされなければならない。

筆者は東京学芸大学附属高校で「世界史」を担当するようになって以来、学習指導要領に示された文化圏学習や主題学習などを推進すると同時に、「世界史」の資料学習を積極的に展開し、また独自の指導方法として、文学作品を利用する「世界史」学習やグループ討議などをおこなってきた。これらの指導方法の中、「世界史」のグループ学習および文学作品を利用した世界史学習について発表したいと思う。

## 一 「世界史」のグループ学習について

「世界史」のグループ学習は、世界史上の重要事項について、生徒相互で討議や意見の交換をさせ、それによって歴史に対する興味や関心を高め、歴史的思考力を深化させることをめざしたものであり、生徒の能動的学習を促進することを目標としている。具体的には教室内の生徒を幾つかのグループに分け、既に学んだことをもとに自由な議論を展開させるわけであるが、実際の運用においてはさまざまな問題点があることはいうまでもない。本項においては、グループ活動の実践報告の一部を紹介しつつ、運営上の問題点などについて考察してみることとする。

## 1. グループ討議の実施計画

本校ではグループ学習を、帝国主義時代に入る直前の学習段階において実施している。したがって討議内容はどうしても、帝国主義時代以前のヨーロッパ史に限定されがちである。実施に際しては、まず2週間程度前に下記のようなプリントを生徒全員に配付し、グループ討議に対する学習上の準備を指示する。これがグループ討議実施の第一段階である。

### 資料B

1. グループ編成(ホームルーム委員に一任)
  - 6～8名(原則として男女同数)
  - グループ長1名(司会および全体会の発表)
  - 書記1名
2. 討議課題 世界史上の人物について
3. 運営
 

第1時……教室内の机をグループ討議用に配列、各人ごとに世界史上最も興味を感じた人物について述べる(なぜその人物を選んだかについても説明)。ついでグループ長の司会のもとに、「個人と時代的背景」というようなテーマについて話し合う。更に発展した場合には、「なぜ、歴史を学ぶか」についても考えてみる。

第2時……書記がまとめた記録をもとに、各グループ長が自分のグループの討議の経過を、クラス全体会で発表。それについての質疑応答を中心に、討議をより深める。
4. 記録 書記がまとめて教師に提出。なるべく簡明に記述すること。

グループ討議の運営に当たり、1グループの人員を6～8名と定めたのは、グループ長の努力のもとに、だれでもが発言できるような雰囲気を作り上げることを意図したものである。ホームルーム単位の討議などでは、とかく発言者が特定の若干名に限定されてしまい、他の多くの者が気おくれを感じて発言を控えるようなまずい状態をつくりあげてしまうことはしばしば経験するところである。とはいっても、小グループとなり、しかも思考傾向の比較的似通ったものが討議をおこなうようになると、個別な狭い問題に深く立ち入りすぎてしまうような弊害もおこりがちで、事前指導は十分に慎重になされなければならない。

## 2. グループ討議の整理と反省

資料として提出した実践報告の一例によってもその一斑が推察されるように、グループ討議には生徒自身で準備し運営できるという長所はあるが、生徒の個性、歴史に対する興味・関心、討議事項に対する基本的知識などはそれぞれ千差万別であり、討議がどのような方向に展開するかは必ずしも予測できない。ややもすれば、司会者自身も意識していなかったような特殊な問題に入ったり、または意見・討論が奇妙な形で対立して円滑な運営ができなかったりする弊害も時にはおこってくる。

以上のような懸念からいっても、グループ討議においては事前指導を重視すると同時に、事後の整理・反省を徹底しなければならない。各グループ別の討議が終わったあと、第3段階として行なうのが、クラス全体討議である。全体討議ではホームルームにおいて、各グループごとにグループ長が討議内容や問題点などを報告し、他のグループ員からの質問や批判を受けて、内容を一層深めることに努力している。

全体会議のあと、再び各グループごとの反省会を行ない、感想もしくは反省などを提出させてグループ討議のしめくくりをしている。以下にその若干の例を掲げてみよう。

### ○グループ討議の反省

- I あまり意見が活発に出なかったのは残念である。グループ長は準備から運営にわたり、終始実に苦勞していたようである。しかしこのような討論を行なったことは有意義であったと思う。自分以外の人の意見を聞いて、そこであらためて自分の考えを見なおすことができると思う。もっとこのような機会を設けて、歴史上の人物だけでなく、個々の事実についてもやってみたい。
- II 知識の確認から始まり、意見の交換を経てむずかしいところへ少しでも触れると急にしらけてしまう。保留の問題もあるので、記録をもとに再三話し合うべきかもしれないが、それよりも他の班がどの程度話し合ったかを、もっとくわしく知りたい。……一つの方法としてはまとめの実践レポートをプリントして、それをもとに個人個人で考えていくとより効果的であるかも知れない。
- III 討議のテーマは革命ということであったが、実際には研究不足のため、その方面の発言は低次元のものが多く発展性に欠けていた。しかし映画とか、文学とか、思想とか、あるいは日本の現状などについては話がはずむ傾向があった。こういうタイプの話は日常ほとんど出ないので興味深かったが、反面日常生活における無気力・無関心などが明らかにされたように思う。

### 3. グループ討議の問題点

グループ討議は生徒の自主性を尊重しつつ運営されるものであるが故に、それだけの長所もあればかなりの問題点も存在することは事実である。またグループ討議には、“生徒の歴史に対する興味・関心を高め、歴史的思考力を深める”効果を期待することができるというものの、その運営が当を得ていなければ、徒らに授業時間を空費し、かえって歴史的興味・関心を減少させかねない恐れすら存在する。

グループ討議の運営を円滑ならしめるためには、まず第一にグループ討議の課題決定ならびにグループの編成をどのようにするかを、教師と生徒代表とがよく協議して決定することが肝要であり、第二に討議に対する生徒各人の意欲を喚起し、積極的な準備をなさしめるための配慮が必要である。第三に討議の時間は約50分に決められているので、限定された時間を十分に活用できるようにグループ全員で協力させること。第四に討議の成果ともいべきまとめのレポートを、書記が最も簡潔な表現で記録できるように指導しておくことなども大切である。

### 4. ま と め

グループ討議は生徒に能動的な学習意欲をひきおこし、また他人の意見を傾聴しつつ自分の歴史的思考力を深めることができる点においてすぐれた学習方法の一つであるといえる。しかしながらその運営だけについてみても、前節で考察したような配慮すべき着眼点があり、教師と生徒とが一体となって努力を重ねてゆかなければ、グループ討議に内在する問題点を克服し、所期の効果をあげることは困難であると思われる。

歴史学習にいわゆる歴史文学をどのように活用すべきかということは、極めて興味ある課題である。最近、社会科における歴史学習は学力テストなどの影響もあって、ややもすれば年代的な重要事項の整理に終わってしまう傾向があり、この場合には、生徒に歴史についての興味と学習意欲をわきたたせることが非常に困難である。歴史学習の楽しさの一つは、過去の人々が現代と同じように、その時代の中で苦悩しつつ自己発展の道を模索したこと、それが歴史の大きな動きとどのようにつながっていったかということなどを考察することにあるが、最近の歴史学習は、その最も大切なものを片隅に放置しているような観がある。歴史学習に発刺とした生命を与え、生徒の人格形成における重要な契機とするためには、教育現場における不断の工夫と熱心な実践とが要請されるゆえんである。

文学作品の利用は、歴史学習を発展的に展開するための有効な手段の一つであり、その具体的

方法についてはさまざまな角度から検討してみることが肝要である。

## 二 文学作品を利用した世界史学習

歴史学習において文学作品を利用する場合、課題学習として読書活動をおこなわせ、文学作品を通して歴史を考察させることも一つの方法である。私は世界史授業のしめくくりとして、「文学に現われた世界史」を共通テーマとするレポートを生徒（高校2年）に提出させ、生徒の感想などを通じて、文学作品利用の有効性を確信することができた。以下に実践報告の一部について紹介する。

### 1. レポートの提出と整理

課題学習としての「文学に現われた世界史」のレポートの要綱は、個人あるいは2，3人までのグループで課題に相当であると思う1冊の本を選ぶこと、次にその梗概および感想を7枚以内の（400字）でまとめることで、期間は1カ月の余裕を与えた。

この課題を与えられて生徒達ははじめかなりとまどいを示していたが、それでも大体の趣旨を理解すると直ちに自主的な活動を開始した。この結果、生徒達は何冊かの文学作品を読んでその中で最も適当なものを選んだようであり、数冊をとりあげても思うようなものが見つからず、変更につき変更で10数冊を読破してしまったという生徒も何人か出たようである。

さて提出されたレポートを時代的、地域的に整理してみると、まず時代的な分類では、近代以前を選んだ生徒は全体の14%で、他の86%は近代以降を選んでいる。また地域的には、東洋関係を選んだ生徒が7%で、他の93%は西洋関係となっている。したがってこの限りでは、生徒の関心は時代的には近代以降に、地域的には欧米諸国のできごとに極端に集中しているとみられるが、ただしこの提出レポートの整理だけからの推定には若干の問題がある。すなわち予備調査において、「どのような書物に関心がありますか」ということを集計した際には、東洋史関係（特に井上靖氏の作品など）を挙げた者が35%近くもあったのに、実際の提出レポートは前述のように、東洋史関係がわずかに7%程度になっていること背景である。これは漠北の異質の世界など、未知の分野に触れようとする探究心から、その方面の書物を読もうとする興味・関心は十分に持ちながらも、一度それに取り組んでみると意外に近づきにくく、レポートの対象として採り上げることを断念せざるを得なかったことを示すものであろう。このことは、世界史教育のあり方にも示唆を与えるものであり、重要な問題点を含んでいるものと思われる。

### 2. レポートの感想

個々のレポートにおける課題の掘り下げ方については、選んだ文学作品が千差万別であり、しかも個性的であるように、極めて多彩な傾向を示している。したがってどれか一つを採って

標準とすることはできないが、アナートル＝フランスの「神々は渴く」を対象として選んだ田丸叔子さんの感想を具体例として紹介する。

これらのレポートを通して考察するに、文学作品を利用する歴史学習には、史実離れという危惧があるとはいっても、歴史上の重要事件を感動をもって学ぶことができることや、歴史における生き生きとした人間の生き方を把握することができる点において独特の意義を持っている。教育現場の実態に即応しつつ、文学作品の利用においても、意欲的な創意・工夫が要請される。

## 終 語

序において述べたように、「世界史」の学習はさまざまな条件から、ややもすれば主知主義的傾向に陥ってしまう可能性があり、これを改善していくためには授業におけるさまざまな工夫が必要であろう。本稿はこのような立場から実施してきた授業方法改善の一形態についてのささやかな報告であり、今後におけるよりよき改善および発展のために、諸先学の御批判ならびに御教導をお願いする次第である。